

## ペスタロッチー教育賞 受賞者紹介

### MISIA 氏

長崎県出身。長崎で平和教育を受けて育つ。1998年歌手としてデビューし、以降、数多くのヒット曲を世に送り出し、昨年開催された東京オリンピックでは国家を斉唱するなど、日本を代表する国民的歌手として知られている。

MISIA氏は、歌手として音楽活動を継続的に行う中、アフリカの子どもたちの命と教育を支え、彼らが自立して生きていけるように持続可能な支援を展開することの重要性をメディアを通じて訴えるだけでなく、その思いを具体的な活動を通して実現してきた。2010年に設立された「音楽とアートの力で社会課題の解決を目指す」ことを目的に著名人とともに社会貢献活動を実施する「一般財団法人mudef」へ参画後は、さらに活発な活動を展開している。mudefにおいては、特にアフリカの子どもたちの命と学びを支えるために、日本の小学校にあたるマゴソ・スクール(ケニア)で学ぶ子どもたちへの学費・給食・セカンダリー・スクール進学支援(学費・教材・生活必要備品等)を中心に行なってきた。ケニアの首都ナイロビにあるアフリカ最大のスラム、キベラスラムに設立されているマゴソ・スクールからセカンダリー・スクールへ進学する子どもたちへの継続的な支援は、過酷な環境下で生きる子どもたちの希望となっている。セカンダリー・スクールを卒業した子どもたちは、就職や進学など、身につけた知識や技術を用いて自立する道を歩んでいる。また、マゴソスクールの姉妹施設として、厳しい生活状況にある子どもに住居を提供する「ジュンバ・ラ・ワト子どもの家」(ケニア)の改修工事(政府基準を満たすための工事)のサポートや、マラウイでの蚊帳配布なども行ってきた。さらに生物多様性(MISIAの森プロジェクト等)を重視する活動や人や環境、社会に配慮する「エシカル」な発想に基づいた商品を購入することで寄付や支援に繋がるショップを手がけるなど、持続可能な社会の形成のための活動も行なっている。

こうした活動やメディアでのメッセージ発信の取り組みが高く評価され、MISIA氏は、2010年に生物多様性条約第10回締結国会議(COP10)の名誉大使、2013年に第5回アフリカ開発会議(TICAD V)の名誉大使、2019年には第7回のアフリカ開発会議(TICAD 7)の名誉大使に任命された。

第五回アフリカ開発会議のレセプションでのスピーチでMISIA氏は自身の長崎での平和教育から「悲しみの連鎖を決して起こしてはいけない」ことを学んだと振り返り、マラリアの蔓延で命を落とす人の多くが5歳未満の子どもであることや、1000万人以上に上るエイズ孤児の問題、3100万人もの学校に通えない子どもの存在を憂いつつ、しかしその過酷な環境下で生きるアフリカの人々と直接接触る中で、お互いに素晴らしいところを学び合い、手を取り合って生きる希望を語った。第7回アフリカ開発会議の際には名誉大使としてアフリカの現状を知り、広く伝えるために、JICAの活動としてザンビア共和国を訪問しているが、その際も首都ルカサにいたるストリートチルドレンや北部のメヘバ難民キャンプで暮らす子どもたちに出会い、その厳しい生活を目の当たりにした。のちに、MISIA氏はNHKのインタビューで、この時の視察を振り返り、複数の国に囲まれたザンビア共和国にある難民キャンプに、さまざまな国からやってきた難民の子どもたちが地元の子どもたちと同じ学校で学ぶ姿を見て、「平和のヒント」になると語っている。

この「お互いを認め合い学び合いながら、持続可能な形でもともに生きることこそが平和を作り出す」というMISIA氏の考えは、氏のあらゆる活動にも反映されており、学校に通う子どもたちをいかに継続的に支援するのか、多様な生物が共に暮らすことを子どもたちとどのように創り上げていくのか、アフリカの人々のみならず、社会的に弱い立場に置かれた人々が自立して生きていくための仕組みをどのように構築するのかといった重要な問題提起を自らの活動で引き受けながら、支援の輪を広げている。MISIA氏の音楽の力でより良い世界の構築を目指し、厳しい環境下で生きる子どもたちの命と学びを支える活動は、子どもたち自身の生活を支えるのみならず、人間の尊厳を守る社会への改革を目指したペスタロッチーの精神に繋がる。氏の長年の努力と功績に対し、第30回ペスタロッチー教育賞を贈呈し、心からの敬意を表すと同時に高く顕彰したい。